

〈博士論文要旨〉

# 古代の鉄生産と渡来人

—— 倭政権の形成と生産組織 ——

花 田 勝 広\*

主論文『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』の構成は次のとおりである。

序 章 問題の所在

前 編 西日本の鍛冶と製鉄遺跡

第 1 章 畿内とその周辺の鍛冶工房

第 1 節 河内の鍛冶工房

第 2 節 大和の鍛冶工房

第 3 節 畿内周辺の鍛冶工房

第 2 章 古墳と鉄器副葬

第 1 節 鉄素材と鉄生産

第 2 節 筑紫・宮地嶽古墳の出土品

第 3 章 政治権力と鉄器生産

第 1 節 倭政権と鍛冶工房

第 2 節 吉備政権と鍛冶工房

第 3 節 筑紫政権と生産工房

後 編 畿内の渡来人と生産集団

第 1 章 畿内における渡来人とその集落

第 1 節 近江の渡来人

第 2 節 河内とその周辺の渡来人

第 2 章 渡来人の墓制

第 1 節 横穴式石室の導入

第 2 節 一須賀古墳群と渡来人

第 3 節 畿内の横穴墓

第 4 節 墓制の変革と集団

終 章 まとめ

まず序章の「問題の所在」では、鉄器生産とそのための鉄生産の実態解明が王権の成立とその性格の究明には不可欠の課題であるという認識に立つことを表明する。さらに従来の研究がどちらかといえば武器、武具、馬具、農具などの鉄製遺物の個別的な製作技法の実証的研究を中心

平成17年度 \*文学研究科文化財史科学専攻

に進められ、それら製品の生産や流通ないし配布の実態を究明するために必要な製作地、すなわち工房とその生産組織の解明が必ずしも進んでいないことを指摘する。その上で古墳時代の畿内を中心とする各地域における鉄生産と鉄器生産の実態の解明をまず第1の課題とする。また当時の鉄・鉄器生産に大きな役割を果たした渡来人の定着の実態、さらに渡来人と手工業生産の関連性を追求し、倭政権の鉄・鉄器生産の組織やそれに対する支配構造の解明を第2の課題として設定する。このうち第1の課題を前編で、第2の課題を後編で取り上げている。

前編の第1章では、河内、大和や畿内周辺における鍛冶工房の実態を、第2次世界対戦後に著しく進展した考古学的な発掘調査の成果にもどついで整理する。そして畿内において大型の鍛冶専門集落が出現する5世紀前葉以降における中核的な工房として河内の大県遺跡群、大和の天理市布留遺跡、葛城市の脇田遺跡の3か所をあげ、それぞれの遺跡の消長やそこでの生産の実態を追求する。さらに付近の古墳のあり方などをも検討し、布留遺跡については物部氏の直営工房であり、5世紀以降の大県遺跡群については物部氏配下の渡来系集団、6世紀以降の脇田遺跡については東漢氏配下の渡来系集団が鉄器生産に関わったものと想定する。

第2章では、鉄・鉄器生産を一体的に把握することをめざし、鉄器生産の原料となる鉄素材の生産と鍛冶生産の関わりについて検討する。現在日本列島で知られる確実な製鉄遺跡で最古のものが6世紀代で、鉄生産の開始期が必ずしも明らかでない現状を前提に、その上で鉄・鉄器生産のあり方を概念的に整理している。製鉄工房には、製錬・精錬・鍛冶を一貫して行う総合型、製錬・精錬段階だけの単独型があるとし、さらに後者には製錬・精錬をもとに行うA類と製錬のみのB類を設定する。一方鍛冶工房については、精錬と鍛冶を行う専門型と鍛冶のみの小鍛冶型の二つのタイプに分類する。その時代的变化については、第Ⅰ期（3世紀後半～5世紀初頭）は鉄素材の大半を朝鮮半島に依存しており、第Ⅱ段階（5世紀前葉～6世紀初頭）には海外の良質な鉄素材に依存しながらも、鉄の国内生産が開始された段階、第Ⅲ期（6世紀前葉～7世紀初頭）は国内生産が本格化した時代であろうとする。また鉄器をはじめ多様な副葬品を出土した筑紫の宮地獄古墳とその遺物について検討している。

第3章では、古墳時代の鍛冶工人が政治権力によってどのように掌握され、組織されていたかを各地の鍛冶工房の実態や古墳への鍛冶具・鉄滓の副葬の実態から追求する。また鍛冶具・鉄滓を出土する集落と古墳はほぼ一定のまとまり内に認められることから、畿内の鍛冶集団の分布を追求し、それぞれの集団の性格を考察する。そして第Ⅲ期の6世紀前葉になると大県、布留、脇田などの大型専門集落をのぞき多くの鍛冶集落が終息する。それは王権による鉄器生産の掌握が進んだ結果があり、またそれは物部氏の衰退という政治的動向とも関連すると考える。さらにこうした検討作業を、鉄生産地域である吉備や鉄素材輸入の中継地である筑紫地方についても行い、特に吉備においては第Ⅱ期末の5世紀末葉以降、津山盆地などの小首長を媒介として倭王権による鉄・鉄器生産工房の直接的掌握が進んだことを明らかにしている。

後編の第1章では、5世紀以降の鉄・鉄器生産に大きな役割を果たした渡来人集団と鉄器生産の関わりを考える前提として、考古学的方法でいかにして渡来人集団を認識できるのかを近江と河内を取り上げて検証する。まず集落については、特異な大壁建物、礎石建物、さらに温突（オンドル）付建物などから渡来人集団の集落を特定できることを明らかにする。さらに古墳につい

でも、特異な横穴式石室や炊飯具ミニチュアなどの特殊な遺物の副葬から渡来系集団の古墳を特定できることを論じている。

また第2章では、第1章の分析結果をも踏まえ、あらためて渡来人の墓制を追求する。そして、石室形態や炊飯具ミニチュア以外にも石室内の棺の形態やその配置、金銅製装身具の釵子、指輪、釧などの副葬、群集墳の群構成にも渡来系集団の特色をうかがうことができることを論ずる。さらに渡来系集団を営んだものと想定されている河内の高井田横穴群を中心に畿内の横穴墓についても詳細な検討を行うとともに、畿内における古墳の終末から火葬墓への変化についても広く資料を整理し、その意味を公地公民制拡充のための氏族政策の結果と理解する。

終章の「まとめ」では、以上の各編・各章を要約するとともに、最後に「鉄器生産と渡来人」の項を設けて、5世紀以降の鉄器生産に渡来人の果たした役割が大きいことを指摘する。

副論文「倭政権と古代の宗像—地域考古学の提唱—」の構成は次のとおりである。

- 序章 問題の所在
- 第1章 宗像の考古学
- 第2章 宗像郷土館とその資料
- 第3章 宗像の地域的特質
- 第4章 倭政権と宗像の形成
- 終章

まず序章では、従来の地方自治体刊行の市町村史の通史には、講座出版物などの通説をなぞって記述されたものが多く、その地域の独自の資料に基づき、地域の各時期の特性を明確にしたものがきわめて少ないことを指摘する。その上で地域独自の資料が豊富にある考古学による新しい地域像の創出には、①既存考古資料の整理、②近年の発掘資料の検証と組み立て、③それらを踏まえた地域史の総合化と倭政権の関わりの追求が不可欠とし、こうした方法にもとづく「地域考古学」を提唱する。

第1章「宗像の考古学」では、宗像地域の考古学研究の歴史を整理し、昭和前期における田中幸夫の活動と宗像郷土館の設置を高く評価する。そしてこの宗像郷土館の資料には宗像郷土史説明のための基礎資料が多く含まれていることを指摘する。

第2章「宗像郷土館とその資料」では、宗像郷土資料館の資料の整理作業を踏まえて、その内容と蒐集資料の特徴を明らかにしている。

第3章「宗像の地域的特質」では、宗像郷土館の資料やその後の発掘調査の成果をもとに、弥生時代から古墳時代に至る宗像の地域像を再構成する。弥生時代の段階では、この地域には北部九州に特徴的にみられる成人壟棺葬がみられないところから、弥生期の「北部九州」から外れていたと考える。しかし北部九州圏の外縁を構成していたことは疑いなく、この地域に独自の地域圏が形成されていたとする。

続いて古墳時代になると、この地域はその生産基盤からは考えられないような大型の前方後円墳や群集墳が盛行することを指摘する。古墳時代前期の4世紀には前方後円墳の東郷高塚古墳

(墳丘長64メートル)が内陸部に営まれ、中期の5世紀になると津屋崎入海沿岸にいずれも前方後円墳の新原奴山22号墳(75~80メートル)、勝浦峯ノ畑古墳(97メートル)、勝浦井ノ浦古墳(70メートル)などが造営される。さらに後期の6世紀には、やはり津屋崎入海沿岸の須多田とともに前方後円墳の在自剣塚古墳(102メートル)や天降神社古墳(87メートル)が、さらに終末期の7世紀には巨石造りの横穴式石室をもつ円墳の宮地嶽古墳(27×34メートル)などの大規模な古墳が造られる。それらのうち宮地嶽古墳はその豪華な副葬品からも『日本書紀』にみられる胸形君徳善がその被葬者と想定され、それ以前の前方後円墳も擬制的同族集団を構成していた宗像氏一族の古墳と想定している。そしてこうした大型古墳の造営は、倭政権の朝鮮半島との交渉に関与し、沖ノ島の祭祀に関わるることによって宗像氏が急速に成長した結果とみる。

さらにこの地域の横穴式石室や群集墳についても精緻な分析を行い、宗像の地域性を追求している。またこの章では宗像地域の鉄・鉄器生産、須恵器生産、滑石製玉類の生産などの手工業生産についても、生産遺跡や古墳の出土遺物から分析を試み、北部九州地域のあり方との比較などを試みている。

第4章「倭政権と宗像の形成」では、前章までの検討を踏まえて北部九州の一地域である宗像の首長と倭政権との関わりを検討する。従来の沖ノ島祭祀のみからみた宗像地域像ではなく、あくまでも在地首長の立場を重視する観点に立って沖ノ島祭祀と宗像の首長との関係を考古資料によって再検討する。さらに宮地嶽古墳とその遺物を詳細に検討し、その被葬者を探っている。

終章では、まず宗像郷土館の資料の地域考古学研究における重要性を再度指摘する。次いで弥生時代の宗像について、北部九州に中心をもつ広形銅矛祭祀圏や今山製石斧、立岩製石包丁の分布圏に入りながらも、成人甕棺分布圏外であるこの地域の特異性を指摘するが、奴国連合との政治的関係については今後の課題とする。古墳時代については、首長墓のあり方を検討し、各時期の宗像各地の政治勢力の動向を検討する。そしてこの地域の複数の集団によって形成された擬制的同族集団が宗像氏にほかならないとする。

さらにこれら宗像の首長墓の動向と沖ノ島における各時期の祭祀遺跡のあり方を対応させて検討する。特に初期律令体制期になると、沖ノ島祭祀に用いられる土器が宗像製品になることから、倭政権から律令国家への移行とともに沖ノ島祭祀も郡司宗形氏によって行われるようになったものと推測している。また宮地嶽古墳の出現から、宗像氏が倭政権による海上交通の掌握において重要な役割を果たすようになったものとする。